

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）クリスチャン・ダニエルズ



論文の概要

黒澤直道氏の「中国少数民族口頭伝承の研究—ナシ（納西）語音声言語の検討による「トンバ（東巴）文化」の再検討—」と題する博士学位請求論文は、中国雲南西北部と四川省西部に居住するナシ（納西）族の宗教経典の本質を解明し、その宗教経典がナシ文化の中に占める位置を、その歴史背景と社会関係及び音声言語の両側面から詳細に考察するものである。合計三年間にわたる長期のフィールドワークに基づく本論文は、これまで「象形文字」として重視してきた研究の限界を超え、ナシ族宗教経典は「ナシ族口頭伝承」の一構成要因であることを明らかにした上、さらに、「ナシ文化の中のトンバ文化」という捉え方を提唱することによって、近年急速に進んだ観光化に伴い出現した「トンバ文化」という概念に内在する矛盾を解決する新たな可能性を提示している。

論文の内容

本文の構成は次の通りである。

序章では、論文の目的に触れた後、論文で「トンバ文化」の核をなすナシ族の宗教経典に対して用いる研究手法と論文の構成に関する説明がある。研究手法は基本的に二つの方向から検討するが、その第一は、ナシ族の宗教経典をめぐる外的な状況、特にその歴史背景と社会との関係を明らかにする。その第二は、宗教経典のテキストそのもの、いわばその内的状況を取り挙げて、音声言語の立場から口頭伝承テキストとの比較で分析している。

第1章では、ナシ族、その宗教と宗教経典に関する概説を行ない、さらに基本用語を定義する。大別すれば、トンバ教の宗教経典には主に二種類の文字、すなわちトンバ文字と呼ばれる「象形文字」とゴバ（哥巴）文字と呼ばれる音節文字が使用されているが、論文は主流をなすトンバ文字を対象にしている。また、宗教経典テキストの分析に用いる口頭伝承は神話（特に創世神話）、民話及び民謡を含んでいることなどが説明されている。

第2章では、ナシ族研究の中心課題として位置づけられてきた宗教経典に関する研究の流れを整理し、その中から生まれた「トンバ（東巴）文化」という概念に関する問題点を指摘する。ナシ族の宗教経典は19世紀後半の宣教師や探検家によってヨーロッパに伝えられているが、現在の研究に最も影響力を与えている研究者は、1920～1940年代ナシ族の居住地域に長期にわたり滞在して調査を実施したジョゼフ・ロックである。ロックの残した膨大な資料は、その後のナシ族研究の基盤となる大きな役割を果たしている。しかし、一方でそれは必ずしも十分に整理されておらず、その圧倒的な分量と複雑さは、他の学者による検討を困難にしている事実を指摘する。また、1950年代以降、中国大陸ではこ

の宗教經典に関する研究が本格的に行われてきたが、そこにみられる一つの顕著な傾向は、ナシ族自身の民族のアイデンティティーとしての「トンバ文化」の研究であり、その最大の特徴は宗教經典の成立年代をはるか古代にまで溯らせようとするところにある。この研究姿勢から生じている問題を次章で詳細に論じる。

第 3 章では、中国の研究者が提唱する「トンバ文化」がナシ族の一般社会とどのように関わっているのか、どのような問題を含んでいるのかという二点にしぼって論じている。第一は、トンバ教が消滅の危機に瀕している点である。ナシ族の生活文化の漢化や文化大革命までの宗教弾圧により、トンバ教が衰退を余儀なくされ、現在トンバと呼ばれる宗教的祭司の高齢化と逝去によって伝統的なトンバ教の存続が危ぶまれている。トンバ文字で書かれた宗教經典は、その内容を記憶しているトンバしか正しく読めないため、今後宗教經典の読解ができなくなる恐れがある。第二は、1980 年代以降の中国では、雲南省全体での急速な観光開発の中で、「トンバ文化」がナシ族地域の観光商品の目玉となった点である。近年では、「象形文字」であるトンバ文字が観光物産化され、トンバ文字による書道作品や印鑑、トンバ文字をデザインしたシャツや壁掛けなどの商品として販売されるようになっており、中国内外にまで広まる勢いを呈している。日本では 2002 年までに一般向けのトンバ文字関連の出版物として 8 冊が出版されており、トンバ文字がデジタル媒体で使用できるコンピューター関連製品がいくつも発売されている。だが、この空前のトンバ文字ブームは、ナシ族の文化はトンバ文化であるという誤ったイメージを形成していると指摘している。

第 4 章では、ナシ族の宗教經典をめぐる外的な状況、特にその歴史背景と社会との関係を検証する。ここでは、第一に宗教經典の成立年代の確定問題と、第二にナシ族社会においてトンバ文字が使用された範囲について、文献調査とフィールドワーク両方の成果に基づいて考察を行なう。第一については、黒澤氏はナシ族の宗教經典の成立年代を確定する証拠が充分ではないことを立証した。17 世紀に書かれたとされる最も古い經典についても、その成立年代の解釈は曖昧で、ましてそれ以前に經典が書かれたという証拠が見つからない事実を明らかにしている。第二については、トンバ文字が基本的に宗教的祭司であるトンバの宗教活動を中心とした範囲で使用され、ナシ族の一般の人にも普及していなかったと論じる。宗教經典の中の一部には「象形文字」を表音的に使用する方法がみられ、また、一部の地域ではナシ語の音節に正確に対応する表音文字が使われたこともあるが、結局それらも文字が主流となることはなかったとする。黒澤氏はその原因を祭司の特権性に求めており、宗教經典とトンバ文字の特権性が、ナシ族の文字の歴史に見られる改革への志向を挫折させ、文字としての大衆化を妨げたためと結論している。

第 5 章では、宗教經典のテキストを言語の立場から分析する。従来、ナシ族の宗教經典は主にその特徴的な「象形文字」として研究されてきたが、黒澤氏は今まで十分な検討が行なわれてこなかった音声言語の側面から詳細な分析をする。氏は自分のフィールドワークで採集したナシの口語資料を用いて、宗教經典の音声言語とナシ語の口語やナシ

族の民謡など口頭伝承資料とを比較した。この分析によって、宗教經典の音声言語は、「ナシ族口頭伝承」という概念の中の一構成要素として理解することが妥当であることが明らかになった。これまで、ナシ族の宗教經典はその特徴的な文字によって強く印象付けられてきたため、非常に特殊な伝承形態として考えられてきたが、その文字テキストは別として、經典の音声言語としての側面をナシの口語やナシ族の民謡と比較すると、それぞれが相互に形式や言語的特徴を変換した関係をもっているとしている。例えば、ナシ語の口語のテキストに、韻文的な形式性を加えたものが民謡のテキストに当たり、さらにこの民謡のテキストに、特殊な語彙や文法的特徴を加えたものが宗教經典の音声言語のテキストに当たるとしている。この分析の結果、黒澤氏はナシ族の宗教經典の音声言語は、ナシ語の口語やナシ族の民謡などを包括した「ナシ族口頭伝承」の一構成要素として理解すべきだと結論付けている。

結章（第6章）では前各章で明示された成果を踏まえて、トンバ文化の位置付けの見直しが論じられている。トンバ文化は本来ナシ文化の下位概念であるが、近年の観光商品化によって象形文字としての側面だけが注目された結果、トンバ文化のイメージが肥大化して、ナシ族の日常的な文化から引き離されつつある点が指摘されている。黒澤氏は、ナシ族宗教經典を核として生まれ、現在ではナシ族の文化そのものと言えるほどにまで肥大化してしまったトンバ文化の突出した位置付けを見直し、ナシ族の様々な文化要素を包括するナシ文化という上位概念の中に含まれる下位概念として、トンバ文化を位置付け直す必要があると結論する。

「資料編」には、黒澤氏自身が現地で採集して録音テープから書き起こしたナシ語の口語テキスト（洪水神話のテキスト）が収録されている。また、ナシ語の記述を理解するために、ナシ語の音韻体系と表記法、基本的な文法の概要やこれらに関わる先行研究などについて詳細な説明が施されている。

論文の評価

この博士学位請求論文が言語と文化の両側面からナシ族の宗教經典を分析している性格を考慮して、審査に当たったのは、新谷忠彦教授（東南アジア言語学）、峰岸真琴教授（東南アジア言語学）、宮崎恒二教授（東南アジア文化人類学）、三尾裕子助教授（東アジアの文化人類学）及び主査を務めたクリスチャン・ダニエルズ（中国西南部・タイ文化圏の歴史）の5名である。審査員の評価は以下のものであった。

ナシ族の宗教經典を同民族の口頭伝承の流れで分析したという新しい研究手法を用いている点から判断して、本論文は日本のみならず、国際的にみても数少ない本格的なナシ族宗教經典研究の学術論文であるといえる。特に、宗教經典の分析において文字より音声言語を重視した点は、中国や欧米の先行業績には見られないオリジナルな特徴である。この手法によって特異な「象形文字」として捉え続けられてきた従来の一面的な見方から脱却して、宗教經典がナシ文化全般の中で占める位置を正確に把握する方法を提示している

点は、今後の研究にとって大きな意義を有している。また、学位請求者がナシ原語の口頭伝承資料をテキスト資料として提供し、それを分析の材料とした点も高く評価された。これまで中国西南部の少数民族を対象とする研究は、原語による資料を用いることなく、漢語や英語などに翻訳された資料を利用することがほとんどであったが、翻訳された資料のみでは当該地域の少数民族の言語文化への理解を深めるには限界がある。雲南西北部での三年間のフィールドワークでナシ語を学習し、自身が録音した口頭伝承を書き起こしたテキスト資料を使用することによって研究が深化した点は審査員全員によって認められた。

また、宗教經典に関する詳細な考察によって提示された論点が、現在のナシ族文化創世過程の解明に貢献している。とりわけ、(1)現在のナシ族文化に対するイメージは、宗教經典の「象形文字」が観光物産化された行為を経て創世された点、(2)そのイメージの普及が「トンバ文化」概念を形成させ、ナシ族に対する学術研究のあり方にも大きな影響を及ぼしている点、(3)ナシ族出身の研究者は自身の民族アイデンティティーをトンバ文化に求めるため、宗教經典の成立年代をできるだけ古代にまで溯らせようとしているが、現存最古の宗教經典は17世紀のものであり、それ以前に確認できない点は、宗教經典とナシ文化の関係を解明するための貴重な指摘であると言える。

このような新たな成果を達成したとの高い評価を受けつつも、本論文には問題がないわけではない。審査委員から出された問題点は、およそ次の3点にまとめられる。第一は、ディスプリンの問題である。宗教經典と口頭伝承との類似性を実証するために、音声言語を分析の手段として使用した手法は評価されたが、このように言語と文化の双方からのアプローチはどのディスプリンに属するのか、ディスプリンについてもっとすっきりした記述が要求されるのではないかという点である。第二は、トンバと呼ばれる祭司が演じる役割についてであった。トンバはもともとナシ族社会の中でどのような役割を果たしているのか、フィールドワークの成果に基づいてその社会的位置をもっとはっきりと描き出すことができたのではないかという点である。第三は、言語のプレゼンテーションの問題である。ナシ語テキスト資料を書き起こすに当たり、音韻体系、子音や母音の解説を加える必要があったのではないか。また、説得力を強化するため、ナシ方言の分布地図をつける必要はなかったか、經典朗誦体を論じた際事例を増やす必要はなかったかという意見が表明された。

口頭試験において黒澤氏は、審査委員からの質問や批判に対して逐一的確に答えた。ディスプリンの問題については、氏は、研究分野は口頭伝承学の研究であるが、宗教經典を研究する場合、その文字テキストの重層性という問題を克服するため、文字より音声言語で分析したほうが有効であるので、言語と文化の双方からのアプローチを採用していると反論し、また、トンバについては、現在トンバの高齢化と逝去によって現地で伝統社会における実態をフィールドワークで調査することは困難であると説明した上、聞き取り調査によると、トンバが必ずしもすべての宗教祭祀には参加していると限らないと答えた。さらに、言語のプレゼンテーションに関する質問に対しては、氏は一々丁寧に回答し

た。

審査委員のこれらの批判と指摘は、上述した本論文に対する評価を変えるものではない。結論として、黒澤氏の学位請求論文は所期の目的を十分に達成しており、内容の豊富さ、さらに論旨の明快さから、審査委員全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに値するものであると判断して、ここに大学院教授会に報告する次第である。